
心の楽園

PECO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の楽園

【Nコード】

N8696N

【作者名】

PECO

【あらすじ】

退屈な毎日の繰り返しだった。
それを変えようとしなかった。

25歳の独身男^{リョウ}遼の新しい職場での出会いが自分を変えていく…。

ため息 1

毎日が同じ繰り返しだった。

酒を飲めば暴れる父、気弱な母、顔を会わせれば文句しか言わない祖父。

なんの目的もなくただいるだけの職場。

職業…パチンコ店社員

趣味…なし

彼女…なし

実家暮らしの25歳独身男なんて

大抵こんなもんだろう。

ただ毎日を過ごしているだけ。

明日からは異動になった

新しい店舗での勤務となる。

それでも自分に何か変化がある訳でもなく
ただ淡々と仕事をするだけだ。

もう4時半すぎか…。

明日は12時に出勤しなければ…。

電気を消してベッドに潜り込んだ。

ため息 2

ガシャーン!!!!!!

下の部屋から何かが割れる音が聞こえる…。

またか…。

まだ眠い目を擦り
ベッド脇の携帯のディスプレイで時間を確認する。

5時16分。

まだ30分しか寝てねえじゃねえか…。

ため息をつきながら下の様子を伺う。

下の部屋ではまだ争い声が聞こえてくる。

はあ…。

また一つため息をつく
とベッドから起き上がった。
伸びをしながら
タバコに火をつける。

ふう。
…。

ガシャーン！！！！！！

また何か割れたらしい。

まだ吸い始めのタバコをギュツと消して部屋を出た。

ため息 3

リビングへ入ると

母親が泣きながら割れたグラスを片付けている。

「朝っぱらからいい加減にしろよ…」

父親に目を向けるとこっちをジロリと見ながらリビングを出て行ってしまった。

中2から異様に伸びた182cmの身長は
165cmの父親にはなかなか効果があるらしい。

やれやれ…。

「おふくろ、俺がやるから…」

背中を擦りながら母親を立たせソファに座らせる。

ごめん…と小さな声で答える母親に笑いかけると
割れた2つのグラスの片付けを始めた。

新聞紙でグラスの破片をくるみ、ビニール袋に入れて口を閉じる。

ふと時計を見ると6時になるところだ。

母親が落ち着いたのを確認して声をかける。

「俺まだ寝るけど…大丈夫か？」

「うん…ごめんね…遼…」

力なく微笑む母親にまた笑顔を向けるとリビングを後にした。

部屋に戻ってタバコに火をつける。

ゆらゆらと揺れる煙を見ながらゆっくりと息を吐く。

疲れた…。

ため息をついてベッドに戻り目を閉じた。

ため息 4

ピピピピピピ...

携帯のアラームが鳴り響き目をつむったまま手探りでボタンを押す。

...寝た気がしねえ...

アラームの設定は10時。
始めの30分を合わせても
4時間ちよつとの睡眠だ。

ふわああ...

大きな欠伸と伸びをしながら目を開け
9月だというのに真夏のような日差しが差し込む窓を睨み付ける。

カーテンを開き窓を開けると
熱と湿気を帯びた風が入ってきた。

あちい...

ピシャリと窓を閉め
エアコンのスイッチを入れて
シャワーを浴びに部屋をでた。

ため息 5

新しい職場までは
車で30分の距離にある。

ハッキリ言って一番行きたくない職場だ。
嫌味ばかりの上司の噂は
どこの店舗に行っても聞こえてきた。
25歳で役職付きの俺は
確実に噂の上司の餌食だろう。

店の駐車場に車を停め
大きなため息をついて
店へと入った。

「おはようございます。
本日よりお世話になります小鳥遊^{たかなし}です。
よろしく願います。」
事務所での挨拶を身についた作り笑顔で済ませ
仕事を始める。

「いやあ…噂の小鳥遊君の仕事の早さを見れるなんて光栄だねえ。」
…早速主任の嫌味だ。
笑顔で振り向いて答える。

「とんでもありません。
こちらの仕事の流れを一日も早く把握して邪魔にならないように頑

張ります。」

何を言われても笑顔を崩さない…

それが今までの職場で培った処世術だ。

嫌味が効かないと分かると主任は何も言わず事務所を出て行ってしまった。

やれやれ…。うちの親父みたいなヤツだな…。

ため息をついてパソコンに向かった。

ため息 6

主任の嫌味を笑顔でかわしながら
黙々と事務処理を進めていた。

ふと時計を見れば16時少し前、そろそろ遅番の社員やバイトが出
勤してくる時間だ。

皆が来る前に一服するか…。

事務所は禁煙なので、アルバイトの休憩所に向かった。

休憩所は8畳程の広さがあった。

真ん中には大きなローテーブル、両脇に3人掛けのソファ、テレビ
に冷蔵庫。

置いてあるものは古いが

なかなか居心地のよさそうな部屋になっていた。

ソファにドカッと座りタバコに火を付ける。

ふう…とゆっくり煙を吐いてつぶやく。

主任うぜえ…。

八重歯 1

プツ…クスクス…。

微かな笑い声にビクツとなつて振り向く。

少し離れた位置にある一人掛けのソファの背もたれに隠れているみたいだ。

「いや、あの…今は…」

ソファに向かつてしどろもどろ声を掛けると背もたれから女の子がヒョコツと顔をだした。

「うんうん。主任、うぜえよね。初めまして。新しい班長さん？」

女の子…ではないかもしれない…。

綺麗な栗色の髪、主張しすぎない上品な化粧、落ち着いた声…。

ただ大きな二重の瞳と屈託なく笑うその顔に身動きが取れなくなつた。

「あり？たからし…たなかし…？？？」

ハッと自分の名前を言おうとしてることに気付く。

「小鳥が遊ぶでタカナシ、小鳥遊 遼です」

どうにか笑顔を取り繕って答える。

「望月 さくらです。驚かせてごめんなさい。遅番専門のバイトです」

彼女はまだクスクス笑いが止まらない様子で申し訳なさそうに俺を見る。

その笑顔から目が離せなかった。

八重歯 2

「おはようございます」

遅番の従業員達が続々と休憩所に入ってきた。

「さくニャンおす」

「おはよ！さくニャン」

入ってきた全員が彼女をさくニャンと呼び頭をポンと叩いている。

望月さくらはニコニコしながら

「あい」

と一人一人に返事をしている。

その姿は幼い子供の様にも見え、外見とはまた違った印象に惹き付けられた。

気が付くと従業員が皆こつちを見てる。

挨拶をしようと向き直った瞬間

「皆自己紹介は朝礼でしょうね。そろそろ時間だから下行くよ」

と望月が言い

「はあい…」

と全員部屋から出て行ってしまった。

気が付けばもうそんな時間なのかと俺は慌てて後に続いた。

八重歯 3

朝礼は階段を降りた所、
ホールに出るドアまでの広い廊下で行われるようだ。

すでにさっきの従業員が
整列している。

望月さくらは皆の正面に一人で立っていた。

チラッと名札をみると名字の下に金色の線が引いてあるのが見えた。

この会社はアルバイトでも昇格制度があり
白、青、黄色、銀色、金色の順に立場が上がっていくのだ。

望月さくらは俺と同じ、バイトながら班長の仕事ができる立場というわけだ。

「それでは遅番の朝礼を始めます。おはようございます！」

「おはようございます！」

さっきの幼い笑顔とは別人の様なキビキビとした話し方に少し驚いた。

「本日より小鳥遊班長がウチの店舗勤務となります。早く馴染んで頂ける様、皆さん協力をお願いします。それでは小鳥遊班長からご挨拶をお願い致します」

「あ…はい」

物腰柔らかくしつかりとした言葉遣いはこちらの方が少し圧倒されながら

簡単な挨拶をした。

全員の自己紹介ののち、望月さくらがテキパキと仕事の指示を出し、ただ驚くばかりの朝礼が終わった。

八重歯 4

ここの従業員の仕事ぶりは前の店舗のそれとは全く違うと言っている程すごかった。

各々がしっかりと責任を持ち、意欲的に従事していた。

彼女、望月さくらも例外ではない。

事務所で一緒に仕事をしていても

俺が分からないと口にする前にさりげなくフォローしたり、ホールの従業員の動きのチェックや、指示…。

主任に嫌味を言わせるきっかけを与えない仕事ぶりだった。

俺…やってけるのか…？

ものすげえ…不安…

そう思った時

「班長？そろそろ休憩しませんか？」

望月さくらがジュースを飲む仕草で話し掛けてきた。

「え…ああ…そうですね」

俺は笑顔を作って彼女の後に続き事務所を出た。

八重歯 5

「ふえゝ…ちかりた…」

望月さくらは休憩所に入るなり大きく伸びをしながら冷蔵庫を開ける。

俺は3人掛けソファに座ってその様子を見ていた。

「コーヒーどぞ。うぜえ主任はどうでしたか？」

ニヒヒと笑いながらコーヒーを持ってきた。

お礼を言って受け取ったコーヒーを一口飲んで答える。

「いや…さっきのは冗談だよ。それにしても望月さんはスゴいね。仕事中は別人みたいだ」

「別人？（笑）でもま、お金を頂いてるんだもん。その分がんばらなきゃ」

正論だ。

ただなんとなく働いている俺には耳に痛い言葉だった。

「主任はうざいけどね」

そう付け足すとケタケタ笑いながら俺の前に座る。

「まいったな（笑）」

二人で笑いながら話をした。

彼女のコロコロ変わる表情が面白くて可愛くて

この店舗に来るのが嫌だと思ったことすら忘れてしまっていた。

八重歯 6

「やっと笑った♪」

望月さくらは頬杖をつきながら嬉しそうに言った。

「えっ?!」

何のことか分からず驚いた。

「だって今度くる小鳥遊班長はいつもニコニコして楽しそうって聞
いてたのに

今初めて笑ったでしょ?」

「…俺笑ってるよ?」

「うん、今はね♪」

確かに作り笑いはしているが、それを見抜かれたことはない。
外でも…家でも完璧に演じているつもりだった。

「どうしてそう思ったんだ?」

「どうしてって…目を見れば分かるでしょ?

やる気ない…とはちと違って…ん…淋しそうな、辛そうな目で無
理して笑ってるもん」

彼女はコーヒーを一口飲むと笑顔で言った。

「今は凄く自然。だから嬉しいよ。八重歯がかわいいしね♪…さて
休憩お終い!!!お仕事戻りましょう」

彼女はスクツと立ち上がると二人分のコーヒーの缶を片付けて休憩所から出ていった。

俺はしばらくその場から動けなかった。

八重歯 7

その後の仕事はなかなか進まず、気が付けば望月さくらを目で追っていた。

彼女は職場の人に好かれているようで

休憩中など自然と周りに人が集まってくる。

彼女は人の目をみて話し

自然な笑顔で周りを包み込んでいる。

彼女は人の変化にいち早く気付き、声をかける。

彼女は俺の八重歯がお気に入りのように

俺が自然に笑っていると嬉しそうに覗き込んでくる。

彼女のONとOFFの不思議な魅力、人に対するあたたかい気遣いに、俺は吸い込まれるように惹かれていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8696n/>

心の楽園

2010年10月11日10時02分発行